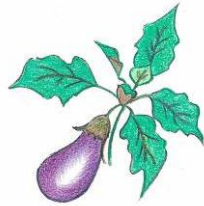


潮流



2017年 9月号

No.257

大津島データ 190世帯
人口 272人 男112人 女160人
高齢化率 78.7%
(平成29年7月31日現在)

題字：六郎万淳一さん イラスト：まゆみさん

行事報告

島の主なできごとを写真で振り返ります。

市役所新採用職員研修

6/29(木)～30(金)、今春に周南市役所へ入庁した40人の新入職員が、大津島で1泊2日の研修を実施しました。写真は、島内での奉仕作業の打ち合わせです。※天候不良のため作業は中止。



学校校庭整備

7/30(日)、学校のグラウンドの草刈りを住民約30人と若潮の会12人でおこないました。



刈尾海岸清掃

7/2(日)、島外約50人と一緒に刈尾で海岸清掃に取り組みました。約1時間のゴミ拾いの後、子どもたちは稚魚の放流などもおこないました。



大津島の友人 (18)

夫河嶋芳隆が生前中は大津島の皆様に大変お世話になり、本人も感謝しております。

ありがとうございます。

私も島に嫁いで50年になり、忘れていた事が多いですが、思い返してみますと、遠石八幡宮で結婚式をあげて、いざ新婚旅行へ出発と思いきや、花嫁姿でサンパンに乗せられて、大津島の我家へ着きました。

何と家には、大津島の方々がたくさん集まっておられ、又披露宴が始まりました。

私は「これは何だ。私は聞いていない！」と気分が悪くなった格好をしました。(本当は船酔いです。)

家に中本家と書かれた品物がたくさんありました。何で中本さんの物が家に置いてあるのか、借物なんだろうか不思議に思いました。「なかもと家」とは何の事？と聞いたら「なかつばん家」なのだそうです。



かわしまけいこ 河嶋慶子さん

「島では、屋号で呼ぶのが普通なのだ」と言われて、「へーそうなんだ屋号なんだ」と、びっくりしました。

河嶋の本家と本家の間にあるから「中本家」なんだそうです。

そう言えば本浦には「ムカエ」「ヤブヤ」「ワタヤ」等々、屋号で呼ぶ家がたくさんあります。

共働きが条件でしたので、徳山市の幼稚園教諭に応募したら、大津小学校に勤める事になり、夫婦で皆様に大変お世話になりました。

書く事はたくさんありますが、我家の恥をさらけ出す事になりますので、これ位で止めておきます。これからもよろしくお願ひします。

特集

本浦石風呂の由来



今回は、大津島の人々の生活の一部として古くから愛され続けてきた、本浦地区の石風呂について、地元で長年保存してこられた皆さんを代表して、安達壽富さんに寄稿していただきました。

石風呂は、文治年間俊乗房重源上人が、東大寺再建の用材切り出しに従事した人夫達の治療と保養のため、多数の蒸風呂を造ったのが起源と伝えられており、石焼の原理を応用した蒸気浴による医療施設で、西瀬戸の限られた地方に分布しており、大津島の本浦にも伝わったとされています。

平成になり、建物は新築されましたが、石風呂本体は当時のまま保存されており、構造は野面石(のづらいし)を内ぶくろみに組み上げ、止めに大石をもって蓋にして石室を築き、石室の外側は30センチ余りの

大津島に数カ所あった石風呂も、現存するものは本浦のみです。近年は、定期的な利用はなくなりましたが、大津島の郷の主催行事などで利用されています。昨年は、NHKでも紹介されるなど、徐々に関心が高まりつつあるようです。



海の郷でのイベント

粘土で覆ってあり、土間は石を敷きつめた上に粘土が張ってあります。残り火を溜めておく囲炉裏と畳敷きの休憩所があり、建物の傍には薬師如来像と称する石像が安置され(現在は別の場所に安置)入浴前には必ず祈念をこめるしきたりが現在も続いています。

焚き方及び入浴方法は、石室内部に乾燥した松葉を隙間なく詰めて、焚き残り火はかき出し、その後葉草(石萱)を敷き、その上にむしろを敷き、着衣のまま心静かに入り横たわります。5分位したら外に出て休み、また中に入ります。これを繰り返します。石風呂浴は、湯治場として、また、地域の社交場として利用されて来ました。

若潮の会通信

インタビュー 渡辺あゆ子

※敬称は省略しています



8月13日、恒例のアイランドカップが開催されました。

今回は初参加2名を含め、総勢32名。感想をどうぞ！

○佐々木照彦「今回はチーム年寄り組(笑)に入れて良かった」

○屋野郁夫「お騒がせしてどうもすみません」

(一)結婚の発表がありました。○古城忠彦「皆さんの結束力が強く、チームを越えて応援できることが嬉しかったです」

○西山和彦「優勝できて良かった。来年も優勝します」

○古城美保子「たくさん集まって良かったです」

○古城誠司(初)「後輩が私をいじめてくれて楽しかった」

○石田一義(初)「すごく良かった！みんな上手」

○野間正信「誠司君が来てくれて嬉しかったです！」

また来年お会いしましょう！

羊の羽は丘にあり

vol.01

新シリーズを預かりました。松田翔剛(マッタシヨウゴウ)です。若輩者ではございますが、よろしくお願ひ致します。

島に来て四ヶ月が経ちました。私が見た記憶に残る島の風景を一枚の写真と共にお伝えして行ければと思います。

写真は移住した最初の朝に見た太華山から昇る朝日です。新たな日々の始まりの記憶です。



ひろしのつぶやき

文川屋野廣志



四季を通してではあるが、夏期には大泊の浜や各地遠浅の砂浜では機帆船の船底掃除でにぎわった。

大潮時4・5日間がピークで、大型船は片舷ずつ2日がかりで、船底掃除は引き潮に合せ竹のササラ状な物に長い柄を付け、付着物やコシキ、海藻を除き、干潮時に合せて船底をたき、次に船底塗料を塗る短時間での重労働である。たき草は冬期山仕事をする人々が松や杉の枝打ちの木の葉を束ねる。大泊にはたき草小屋と云ふ大きな倉庫もあった。各船共々、船籍港や運搬物、航路の共有で友船同志助け合いが強かった。

船底掃除後、潮が満ち船が浮き上る迄、広い砂浜はたちまち陸上競技場となる。重い錨を持ち上げる力くらべ、巾跳び、相撲あり。体操の白井選手並の地上転、バク転、逆立でどこまでも歩くオジサン。特に棒押がはやった。3メートル位の丸太棒を腹や腰にあてて、1対1で押しくらべ、各船の声援も大きく毎回たて船時には続けて居た。昭和初期の富国強兵の時期は、体力と忍耐力は若者の宝であった。

我が家の片船仲間であったKさんとHちゃんの遠泳を思い出す。親友同志二人は思い立った様に刈尾の浜より樺島に泳ぎ渡り、黒髪へと行き、宮ノ浦より蛙島に渡り、瀬戸浜亀ヶ鼻へ泳ぎ着き、二人並んでとぼとぼ大泊へ帰り着いた。私が5年位だろつか、仲よき二人は同時に召集兵としての赤紙を受け、親友繋がり確かめ泳ぎ比べたのかもしれない。Kさんは戦後故郷で銭湯をやっていると聞かぬが、Hちゃんの帰還は聞かない。戦後72年、戦死者310万人の内1名かと目つむり……ひろしひとりつぶやく。

※原文のまま掲載しています。

知っちょるかね

海辺のアルバム

文川松本千恵子



写真といえば、昔は貴重なもの、年に何度も写るものではなかった。私なども最初の写真は、一歳の祝いにと写真館で撮ってもらったもので、それから後、暫くは写真はなく、次は母の手縫いのワンピースを着て、口を真一文字に結んだ、いかめしい顔の五歳頃のが登場する。

写真を撮って貰うんじゃから、笑いなさいと何度も言われたらしいが、とうとう笑わず終いだっただと言っ一枚だ。小学校入学に一枚。遠足修学旅行で何枚か。なので、一枚一枚に思い出がいっぱい詰まっています、その一枚を見るだけで、その時折々の出来事が、鮮やかに蘇る。たとえば、馬島の学校の落成祝いの一枚。すでにそこに写っている人の、ほとんど

どが彼岸の彼方に旅立っているけれど、それぞれが趣向を凝らして、その時代一生命の仮装で、チリ紙で作った花を頭に飾り、子供の鮮やかなへこ帯やふわふわのネグリジエをはしょってピエロに扮したり、日頃口紅ひとつもつけた事のない母ちゃん達が、行列をくんで、練り歩く。また、一枚には、学校の草刈りの後の記念写真。人数が多くて、自分の母ちゃんがどこに居るのか、豆粒ほどの中から探してみれば、母ちゃん後ろの方で顔半分しか写ってなかったり。婦人会が、菊の栽培を始め、出荷前の菊を前に誇らしげな母ちゃん達の顔がならび。その時代毎の、記録とも言える父母の祖父父母の写真達。下って今、携帯電話やスマホ、パソコン、デジカメ

には、おびただしい写真がある。自分自身も三千枚も保存された写真の始末が出来ず、使えもしない携帯電話を持っていく有様。いつぞや聞いた終活の話に、残されて困る物の中に、写真というのがあり、我が家の写真の量を思い浮かべて、さもありませんと思うに至り、写真の整理を始めていくもの、眺めていると、子供達の可愛かった頃が懐かし、若い自分が懐かし、とても整理出来ずにいる。しかし、その内、我が家用に一冊、子供達に一冊づつ、それにその頃思ってしまった短歌を書いて、残しておき、後はわが身が叶う内に始末しようと考えている。公民館にも、懐かしの写真があり、多くが劣化しているの、これも差し上げる人があれば、引き取って頂き、あるいは島のアルバムに出来ればと思ったりする。

海辺の民のアルバム作り、目下の私の目標でもある。

徳山博見聞録

5. 海を渡るいろんな生物？

文川回天記念館

三崎英和



長女が福川中学校に通っていた時、大津島中学校に勤務していたことがある理科の先生が、大津島勤務時代、大津島から福川まで泳いで渡ったことがあると話をされていました。大津島の近江から福川まではおよそ2km。ゆっくり泳げば、泳ぎきれない距離ではないと思いましたが、潮の流れなどを考えれば、ゆっくり泳げば泳ぐほど、その影響を受けて流されていくはず。まあ、よく泳がれたなあと感じました。ところで最近、海を渡るのは人だけではありません。大津島でも暴れまくっているイノシシ。国内ではこれまで、2〜30kmも離れている島まで泳いで渡ったと考えられる個体がいることが確認されています。